

## 吉田松陰自賛肖像考

はじめに

山田 稔

吉田松陰に関する基本文書群に、山口県文書館所蔵の「吉田松陰関係資料」七五四点がある。これは、昭和二十八年（一九五三）、東京の吉田家から山口県が寄贈を受け、山口県立山口図書館に架蔵されていたが、昭和三十四年（一九五九）、山口県文書館の設立に伴って移管されたものである。この関係資料の中に、本稿で取り上げる「吉田松陰自賛肖像」<sup>②</sup>がある。本像は、安政六年（一八五九）五月、幕命による松陰の江戸護送が目前となった際、門下生の松浦松洞が描いた肖像に、松陰が自ら賛を入れたものである。

この松陰の自賛肖像が複数存在することは、吉田庫三著『松陰先生遺著』（明治四十一年）、福本義亮「勤王画士松浦松洞」（同著『吉田松陰之殉国教育』所収、昭和八年）、定本版『吉田松陰全集』第一巻、昭和十一年。以下、吉田松陰全集は『全集』と略記）、広瀬豊著『吉田松陰の研究』（昭和十八年）などで明らかにされていた。その後も、それぞれの自賛肖像が、出版物や展覧会で紹介されているが、全体を詳細に比較検討されることはなかった。筆者は、予てよりこの自賛肖像に関心を持っていたが、『山口県文書館蔵吉田松陰関係資料目録』（山口県、平成十八年三月、

以下『目録』と略記)の編集に携わった関係で、館蔵の自賛肖像に加えて、全国各地に残る自賛肖像のすべてを熟覧することができた。その成果は、拙稿「吉田松陰肖像(自賛)について」(『目録』所収)、同「吉田松陰自賛肖像(中谷本)について」(『山口県地方史研究』第九九号、平成二十年)、吉田松陰自賛肖像について(第一〇八回山口県地方史研究大会、平成二十年十一月)などで発表してきたが、本稿はそれらを総括したものである。

### 一 自賛肖像の作成経緯

自賛肖像の作成経緯は、松陰自身が次のように書き残している。「十六日、朝、肖像の自賛を作る。像は松洞の写す所、之れに賛するは士毅の言に従ふなり」(『東行前日記』、普及版『全集』第一二巻所収)。つまり、賛を作ったのは安政六年(二八五九)五月十六日の朝で、肖像を描いたのは門下生の松浦松洞、賛を入れたのは小田村伊之助(士毅、楳取素彦、松陰妹婿)の勧めであったことがわかる。また、跋は翌十七日に作っている(『東行前日記』)。なお、複数作られた自賛肖像の、賛はほぼ同文であるが、跋は書き与えた相手によって異なっている。

肖像の筆者・松浦松洞(一八三七〜一八六二)は、萩松本の商人の家に生まれた。生家跡は、杉家と松下村塾に程近い場所にある。通称亀太郎、名は知新、字は無窮。松洞と号した。幼時から絵を好み、羽様西涯に四条派を学び、のち小田海樵に師事した。松陰の教えを受け、尊王愛国の人となり、忠孝節義の人物を精力的に描いた。「才あり氣あり、一奇男子なり。無逸(吉田栄太郎)の識見に及ばざれども、而も実用は之に勝るに似たり」(『己未文稿』、普及版『全集』第六巻所収)と松陰は評している。文久二年(一八六二)四月、京都粟田山で自刃。享年二六歳。「維

新功労者履歴一」・毛利家文庫七三藩臣履歴七〇、普及版『全集』第二二巻・関係人物略伝参照。なお、松洞の伝記に、前掲『勤王画士松浦松洞』がある。また、京都大学附属図書館に、絹本着色「群鶴図」など、松洞の絵画作品が複数所蔵されている。

では、この肖像は、松陰の風貌をどの程度表現し得ているのであろうか。松陰の風貌は、「筋骨逞しからざれども、修幹瘦軀、亭然として長し。少時騎を習ひ、また剣を学びしが、共にその妙に至らず。これ文中屢々割鶏の力なしと称する所以か、顔やや長く、隆準にして、白面に痘痕を帯ぶ。一見威風の人を襲ふものなし。ただ眼光の爛々として射るのみ」(広瀬豊著『吉田松陰の研究』)との評がある。現存する自賛肖像は、構図に異同があるものの、いずれも前評のような松陰の風貌をよく表している。ところで、松陰が江戸へ出立する前日、久坂玄瑞は密かに獄中の松陰を見たようである。その状況を高杉晋作宛の書状で「僕竊見先生於獄、瘦骨嶮崢、髮乱被面、死生危之際、恰然処之無有難色」(吉田松陰関係資料二〇一、妻木忠太著『久坂玄瑞遺文集 上』所収)と記している。各肖像とも、整然とした身だしなみが描かれており、久坂の書状にあるような、険しく刺々しく、髪が乱れて顔を覆うといった獄中の容姿そのままを描いたものではない。

また、肖像の描かれた時期について、『吉田松陰の研究』は、野山獄入獄以前からとしており、その証左として次の二点を挙げている。まず、門下生平野清実の談話に「松浦松洞が先生の肖像をかきし時は、其顔を似せるに苦心し、幾度もかきて先生に見せたり、先生は鏡を以て之れに照して批評せられ、像遂に成る、元来松洞が先生の像をかき始めたのは、先生東行の頃より二三年前にて、村塾にてかきたるなり、かねてより、身の行末を慮られたるなり、松洞のかきしは、余その現場を見たるなり」(『関係雑纂』、定本版『全集』第一〇巻所収)とあること。そして、安政五

年暮に入獄する際に、入江杉藏から「子の面目復た見るべきこと難し。子の面目を見るべきものは、其れ唯だ文辞か。願わくは為に一言を留められんことを」と願われ、「予戯れに之を拒みて云わく、吾れ画を善くせず、画を善くする者は松洞生なり。向に余の面目を写せり。面目みるべし、何ぞ文辞を必とせん」(「松陰詩稿」、大衆版『全集』第六卷所収)と答えていることである。一方、「東行前日記」安政六年(一八五九)五月二十一日条(普及版『全集』第一一巻所収)に、四つの跋が記されている。その一つに「吾が友無窮(松浦松洞)は画家にして、(中略)、今吾れ將に往かんとするや、復た獄に來たりて吾れを貌す。吾れ果して終りを善くせば、此の像當に清狂と并せ伝ふべし。此の像連作数本あり、此れ其の家藏に係る」とある。この記事は、松洞が肖像を描くために獄中の松陰を訪ねたことを示している。

以上から、肖像は、松下村塾時代から松浦松洞が描いており、江戸護送の直前に、野山獄中の松陰を訪ねて描いたものもあつたと考えられる。また、その出来映えは、松陰自身が認めるものであつたことがうかがえる。

## 二 自賛肖像の遺例

では、松陰の自賛肖像は、何点作成されたのであろうか。この点に関する情報は、定本版『全集』第一巻に簡潔にまとめられている。すなわち、松陰が「自賛」したものは合計八点。このうち、「自賛肖像」は六点で、「自賛のみ」で肖像を伴わないものが二点とされる。ちなみに、自賛肖像遺品のひとつである中谷本の跋に「予為人書以賛凡七通、今已厭之、(中略)、将発之前夕」と記されることから、中谷へ与えたものが最後であり、松陰が自賛したものが八点

であることが判明し、定本版『全集』第一巻記載の数量と合致する。

一方、現存する自賛肖像は、①吉田家本(山口県文書館蔵)、②萩松陰神社本(萩市・松陰神社蔵)、③品川本(京都大学附属図書館蔵)、④久坂本(世田谷区・松陰神社蔵)、⑤岡部本(周南市美術博物館蔵)、⑥中谷本(個人蔵)の計六点である。また、自賛のみで肖像を伴わないものに福川本(萩博物館蔵、『目録』所収)一点があり、自賛のみは合計七点になる。この他に、自賛のみの松浦本があつたとされるが、所在不明である。つまり、松陰の「自賛」は八点作られたが、そのうち、「自賛肖像」六点すべてと、「自賛のみ」一点の、合計七点が伝わっていることになる。

以下は、各自賛肖像の書誌と所見である。なお、賛は吉田家本と萩松陰神社本のものを、跋は全てを掲載した。

### (一) 吉田家本

山口県文書館蔵



吉田松陰自賛肖像考(山田)

〔品質・形状〕絹本着色 掛幅装・箱入

〔頁数〕一幅

〔法量〕縦九九・一cm 横三五・八cm

〔作成年〕安政六年(一八五九)五月(十七日)

〔関防印〕「日夕佳」(朱文長方印)

〔落款〕二十一回猛士藤寅撰并書、「吉田矩方」(白文方印)、「子義氏」(朱文方印)

〔賛〕三分出盧兮諸葛已矣夫、一身入洛兮賈彪安在哉、心師貫高兮而無素立名、志仰魯連兮遂乏釈難才、読書無功兮樸学三十年、滅賊失計兮猛氣廿一回、人譏狂頑兮郷党衆不容、身許家國兮死生吾久育、至誠不動兮自古未之有、人宜立志兮聖賢敢追陪

〔跋〕己未五月、吾有関左之厄、時幕疑深重、復帰難期、余因以永訣告諸三友、謀使浦無窮肖吾像、吾自賛之、願無窮知吾者、豈特写吾貌而已哉、況吾之自賛乎、諸友其深藏之、吾即磔市、此幅乃有生色也

\*無窮||松浦松洞

\*己未||安政六年(一八五九)

吉田家伝来の「吉田松陰関係資料」七五四点の一つ。吉田庫三著『松陰先生遺著』に図版が掲載され、例言に「家蔵に係る」と記されている。昭和八年(一九三三)五月、広瀬豊が吉田家所蔵の松陰関係文書を調査した際の「吉田家所蔵遺墨類目録」(同氏自筆、「吉田松陰文書目録一件 昭和二十九年」所収、山口県文書館蔵)に記載されており、同家の伝来であることが確認できる。ちなみに、同目録には「昭和十九年三月二日松陰神社預」の朱筆注記があり、「(受領)」と記されることから、一時期、世田谷区・松陰神社に預けられていたことが判明する。

諸本の中で唯一の跣坐像であり、羽織を纏わず、脇差を左脇に置いた、やや寛いだ姿勢である。着物の彩色が濃紺である点も特徴的で、画面に締まりを与えている。「顔やや長く、隆準にして、白面に痘痕を帯ぶ。一見威風の人を襲ふものなし。ただ眼光の爛々として他を射るのみ」と評された松陰の面貌をよく表している。

賛の末尾を「人宜立志兮聖賢敢追陪」とするのは本図のみで、他はすべて「古人難及兮聖賢敢追陪」である(傍註||筆者)。跋は、本図と萩松陰神社本が、特定の人物に宛てたものではなく、「諸友」に宛てたものとなっている。

料紙は、本図と萩松陰神社本が絹本で、他はすべて紙本である。また、賛・跋に捺した印の組み合わせは、関防印に大き目の「日夕佳」、落款に「吉田矩方」「子義氏」を用いた場合と、小さめの「日夕佳」と「矩方」の二通りがあり、本図と萩松陰神社本、中谷本が前者を採用している。ちなみに、松陰が生前に使用した印は六種類である(吉田松陰関係資料一九三)。このうち、小さめの「日夕佳」「矩方」「吉田矩方」「子義氏」の四種(両面篆刻のため二類)は、山鹿流兵学を松陰に伝授した林百非が彫って与えたものである。

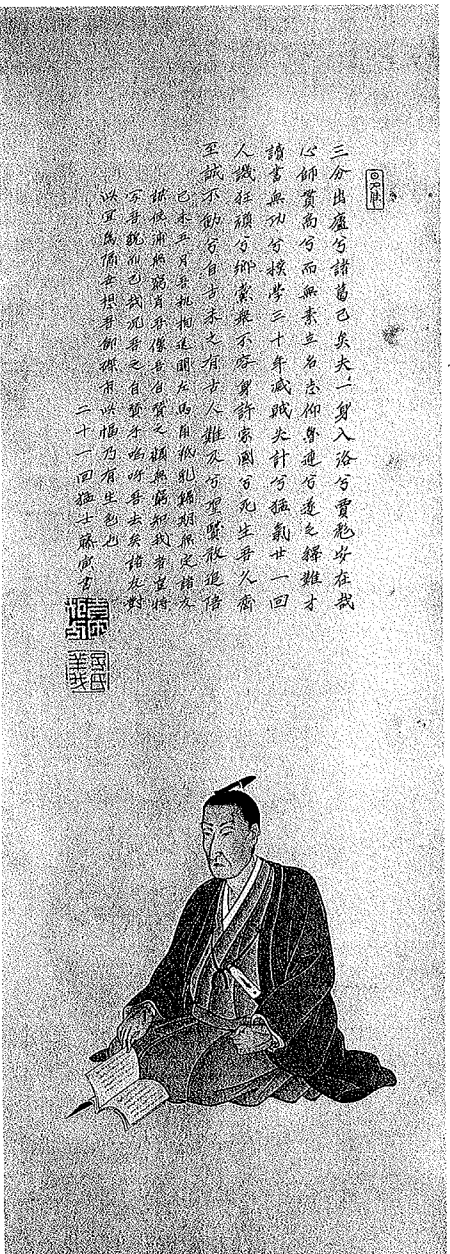
本図の賛・跋は「東行前日記」(定本版『全集』第七卷所収)に記載が無く、作成日を確認できないが、内容からみて萩松陰神社本とほぼ同時の完成と考えられる。本図は、賛・跋の筆致、肖像の配置など作品全体のバランスが良く、萩松陰神社本と並ぶ吉田松陰自贊肖像の秀作である。なお、平成十九年(二〇〇七)度に、保存修理事業を実施している。

(一) 萩松陰神社本

萩市・松陰神社蔵

〔品質・形状〕絹本着色 掛幅装 箱入

〔頁数〕一幅



〔法量〕縦九九cm 横三五・四cm

〔作成年〕安政六年(一八五九)五月十七日

〔関防印〕「日夕佳」(朱文長方印)

〔落款〕二十一回猛士藤寅書、「吉田矩方」(白文方印)、「子義氏」(朱文方印)

〔贊〕三分出處兮諸葛已矣夫、一身入浴兮賈彪安在哉、心師貫高兮而無素立名、志仰魯連兮遂乏釈難才、讀書無功兮  
樸学三十年、滅賊失計兮猛氣廿一回、人譏狂頑兮郷党衆不容、身許家國兮死生吾久弃、至誠不動兮自古未之有、古  
人難及兮聖賢敢追陪

〔跋〕己未五月、吾執拘送関左、馬角羝乳、帰期無定、諸友謀使浦無窮肖吾像、吾自贊之、顧無窮知我者、豈特写吾  
貌而已哉、況吾之自贊乎、嗚呼、吾去矣、諸友对此、宜為隔世想、吾即磔市、此幅乃有生色也

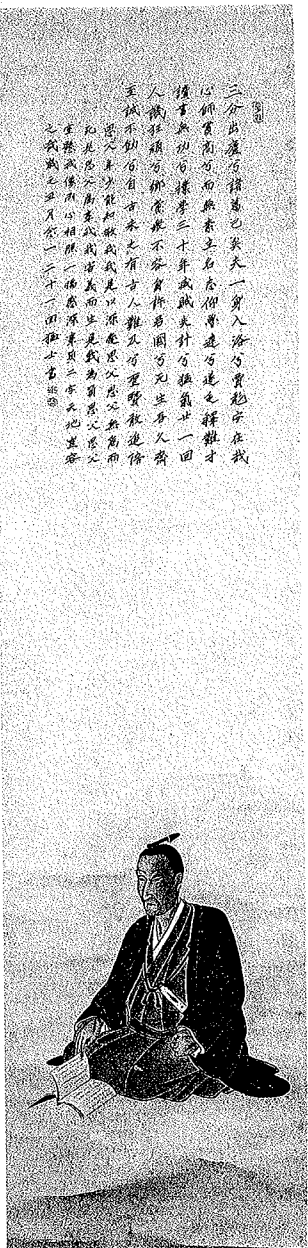
萩市・松陰神社に所蔵される一幅。同神社は、明治二十三年(一八九〇)、松陰の実家杉家の屋敷地内に土蔵造り  
の小祠を建て、松陰が、安政六年(一八五九)十月二十日付けの父・叔父・兄宛書状(永訣の書)で頼んだとおり、  
平生用の硯と書状を御霊代として祀ったのを創始とする。明治四十年(一九〇七)、萩城内にあった宮崎八幡の拝殿  
を移築して、県社に列した。本図の所在について、『松陰先生遺著』に「萩松陰神社図書館に存置」とあり、『吉田松  
陰の研究』では「松陰神社宝物庫」にあると記されている。一方、『吉田松陰の研究』には、萩市・杉家の所蔵品は、  
一切(松陰神社)宝物庫に寄贈されたので、一物も残っていない旨が記されている。神社側に受贈の記録はないが、  
自賛肖像の作成経緯など諸々の状況からして、本図は杉家伝来とみて差し支えないと思われる。なお、この点に関し  
て、記録上での所在が明確に確認できることや、萩市・松陰神社において宝物として長年大切に保存されてきた経緯  
に鑑みて、本稿では、「萩松陰神社本」の名称を用いることとした。

羽織を纏い、脇差を差して正座し、右手で書物を捲る姿を描く。この構図は、後述の品川本と中谷本に共通してい  
る。面貌は、吉田家本に比してやや肉付き良く描かれている。端正で落ち着いた姿から、至誠の人・松陰を感じさせ  
る作品である。

一跋は、「東行前日記」安政六年五月十七日条(定本版『全集』第七卷所収)と同文であり、本図は同日の完成とみ  
られる。「東行前日記」の記事から作成日が推定できるものは、本図のほか品川・岡部・久坂・松浦本の計五点であ  
るが、その中で本図が最も早い成立とみられる。なお、平成四年(一九九二)に軸装の修復が施されている。

(三) 品川本

京都大学附属図書館蔵



〔品質・形状〕紙本着色 掛幅装 箱入

〔頁数〕一幅

〔法量〕縦二二四・二cm 横三〇cm

〔作成年〕安政六年(一八五九)五月二十一日

〔関防印〕「日夕佳」(朱文長方印)

〔落款〕二十一回猛士書、「矩方」(白文印)

〔跋〕思父年少能知敬我、我是以深爱思父、思父無為而死、是思父為辜我、我害義而生、是我為負思父、思父室懸我像、両心相照、一幅感深、辜負二字、天地豈容之哉、歲之五月念一

\* 思父 品川弥二郎

門下生品川弥二郎に与えた一幅。京都大学附属図書館所蔵の尊攘堂資料の一点。尊攘堂は、明治二十年(一八八七)、品川弥二郎が、師松陰の遺志を継いで京都に創設。幕末維新の志士の霊を祀り、関連資料や遺品などを収集した。品川の没後、所蔵品は京都帝国大学に寄贈され、同大構内に二代目尊攘堂が建てられた。軸の表紙に「松陰先師尊影 尊攘堂主やじ宝蔵」と墨書され、「野村子爵寄贈」の朱色の貼紙がある。

構図は、萩松陰神社本と同じく、正座して右手で書物を捲る姿を描く。「東行前日記」安政六年五月二十一日条(定本版『全集』第七卷所収)に跋の記載があるが、本図とは一部が異なっている。

賛は、萩松陰神社本と基本的に同文であるが、同神社本が「身許家<sup>○</sup>国<sup>○</sup>兮死生吾久<sup>○</sup>斉」であるのに対して、本図では「身許<sup>○</sup>君<sup>○</sup>国<sup>○</sup>兮死生吾久<sup>○</sup>斉」となっている(傍註 筆者)。「家国」とするのは、吉田家本・萩松陰神社本・久坂本・岡部本で、「君国」は品川本・中谷本である。印の組み合わせは、関防印に小さめの「日夕佳」、落款に「矩方」となっている。

(四) 久坂本

世田谷区・松陰神社蔵

〔品質・形状〕紙本着色 掛幅装 箱入

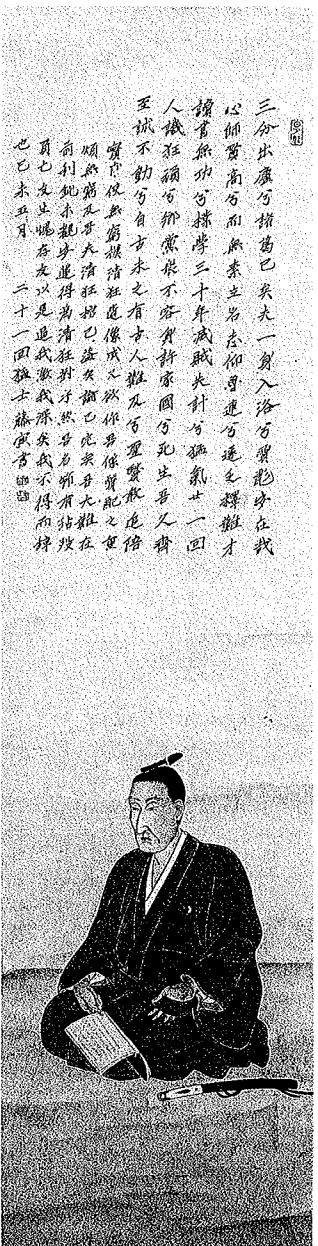
〔頁数〕一幅

〔法量〕縦一〇三・二cm 横二五・六cm

〔作成年〕安政六年(一八五九)五月二十一日

〔関防印〕「日夕佳」(朱文長方印)

〔落款〕二十一回猛士藤寅書、「矩方」(白文印)



〔跋〕実甫使無窮模清狂遺像成、又欲作吾像贊配之、重煩無窮及吾、夫清狂棺已蓋矣、論已定矣、吾大難在前利鈍未  
 覩、安邊得為清狂对乎、然吾名節有玷歿負亡友、生愧存友、以是逼我激我深矣、我不得而辞也、己未五月

\*実甫 久坂玄瑞

\*清狂 山田

世田谷区・松陰神社に所蔵される一幅。同神社は、明治十五年(一八八二)創建。松陰の墓が、同神社境内にある。  
 安政六年(一八五九)十月、江戸伝馬町で処刑された松陰の遺骸は、小塚原回向院に埋葬されたが、文久三年(一八  
 六三)一月、高杉晋作らの手によって若林大夫山(現世田谷区若林)に改葬されたものである。

本図は、跋の内容から、久坂玄瑞に与えたものと分かる。表装の裏面に「日下部様へ呈上仕候 誠」と墨書された  
 貼紙がある。「吉田家所蔵遺墨類目録」(前掲)に記載があることから、昭和八年(一九三三)五月時点で吉田家の  
 所蔵であったことが確認でき、「昭和十九年一月廿一日東京世田谷松陰神社に奉納」との朱筆注記がある。また、本  
 図の納箱の蓋裏に、「奉納 東京松陰神社 昭和十九年大東亜戦決戦之春 吉田茂子」と墨書されており、前掲の遺

墨類目録の記述と一致する。ちなみに、本図は、定本版『全集』第一巻に吉田家所蔵と記されており、また、『吉田  
 松陰の研究』で東京の吉田家に二幅あるとされるうちの一幅と考えられる。

羽織を纏わず、正座して脇差を左脇に置き、右手で書物を持ち、左手を帯に差す姿を描く。賛は、萩松陰神社本と  
 同文である。跋は、「東行前日記」安政六年五月二十一日条(定本版『全集』第七巻所収)に記載があるが、本図と  
 は一部が異なっている。

周南市美術博物館蔵

〔五〕 岡部本

〔品質・形状〕紙本着色 掛幅装 箱入

〔頁数〕一幅

〔法量〕縦九三・七cm 横二五・八cm

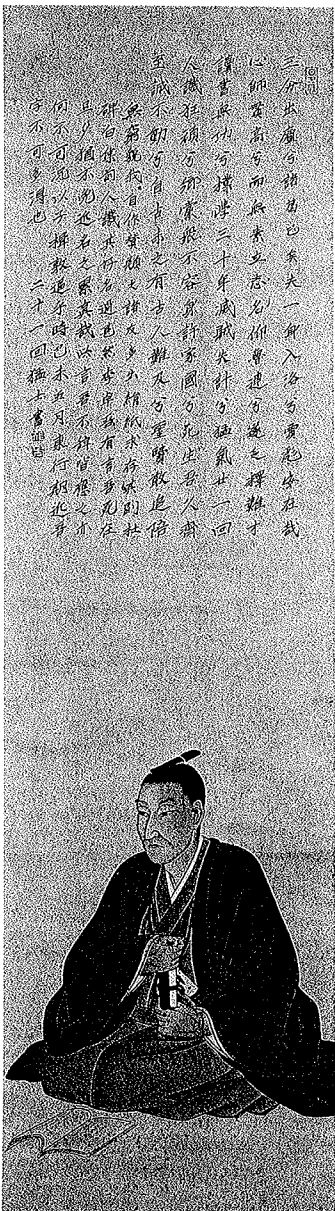
〔作成年〕安政六年(一八五九)五月二十一日

〔関防印〕「日夕佳」(朱文長方印)

〔落款〕二十一回猛士書、「矩方」(白文印)

〔跋〕無窮貌我自作賛題之、諸友多出絹紙求存其副、杜碑白集前人譏其好名過甚、然李卓吾有言、吾死在旦夕猶不  
 免近名之累、真哉此言、吾不辭皆心之亦何不可、況以子楫敦逼乎、時己未五月、東行期近、吾字不可多得也

\*子楯 岡部富太郎



門下生岡部富太郎に与えた一幅。本図は、藤田家に所蔵されていたが、その後、美術商から個人の手に渡り、平成三年(一九九二)、徳山市(現周南市)が寄贈を受け、現在、周南市美術館が所蔵している。

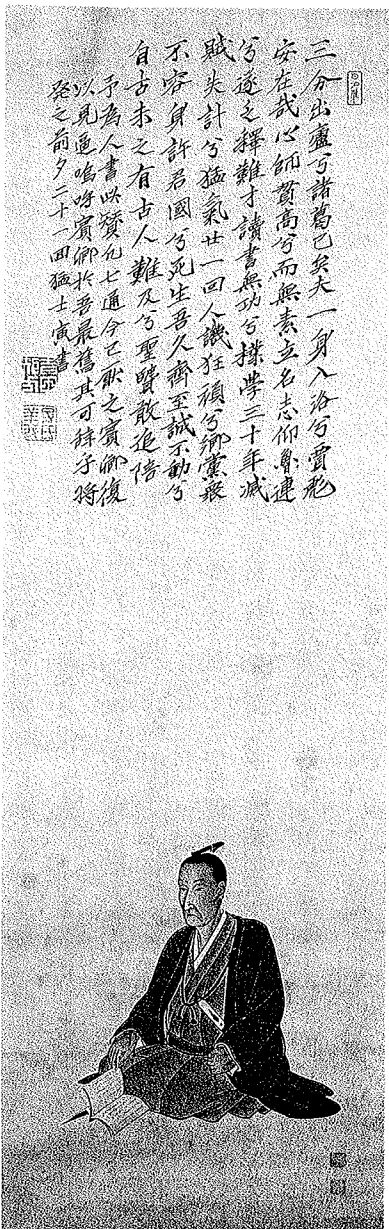
賛は、萩松陰神社本と同文である。跋は、「東行前日記」安政六年五月二十一日条(定本版『全集』第七卷所収)に記載されているが、本図とは一部が異なっている。

正座して羽織を纏い、両手で巻子を縦に持ち、書物を膝前に置く姿を描く。羽織の裾が画面から大きく切れているのは、表装替えに伴うものであるうか。目が大きく、肉付き良く描かれ、他の肖像と面貌が大きく異なる印象を受けらる。また、体軀の一部にデッサンの狂いも見受けられ、墨描線も、他に比して粗めである。さらに、賛に注目すれば、「心師貫高兮而無素立志、志仰魯連兮遂乏釋難才」とすべき所を、「心師貫高兮而無素立志、名仰魯連兮遂乏釋難才」としている(傍註 筆者)。これは明らかな誤記で、本図の「志」「名」の右側に打たれた墨点は修正の意であろう。

岡部に与えた自贊肖像として現存する一幅であるが、本図の成立については検討すべき点が多い。

(六) 中谷本

個人蔵



三分出處 諸君已矣夫一身入浴 實恥  
安在哉 心師貫高兮而無素立志 仰魯連  
兮遂乏釋難才 讀書無功兮操筆三十年 賦  
賦失計兮猛氣壯 一回人機 狂頑兮御黨 衆  
不容 負許君國兮死生吾久 誓至誠不欺兮  
自古未之有 古人難及兮聖賢敢後 傍  
予為人書 以贊化七通命 亡歌之實 御後  
以見 龜嶺 實御 長壽 最舊 其可 待子 將  
發之前夕 二十一日 猛士 實書

〔品質・形状〕紙本着色 掛幅装 箱入

〔員数〕一幅

〔法量〕縦一一七cm 横三七cm

〔作成年〕安政六年(一八五九)五月二十四日

〔関防印〕「日夕佳」(朱文長方印)

〔落款〕二十一回猛士實書、「吉田矩方」(白文方印)、「子義氏」(朱文方印) / 「松洞」(白文方印)、「聽鶴」(朱文方印)



〔跋〕予為人書此贊凡七通、今已厭之、賓卿復以見逼、嗚呼賓卿於吾最旧其可辭乎、將發之前夕

\*賓卿 中谷正亮

門下生の中谷正亮へ与えたものである。跋に「予為人書此贊凡七通、今已厭之、(中略)、將發之前夕」と記されることから、松陰の自賛になるものがおよそ八通であり、本図が最後に作成されたものと分かる。肖像の右下に、筆者松浦松洞の落款(「松洞」「聴鶴」)がある。全自賛肖像の中で、松洞の落款があるのは、本図のみである。印は、吉田家本・萩松陰神社本と同じく、関防印に大きめの「日夕佳」、落款に「吉田矩方」「子義氏」を用いている。

桐箱に収納されており、箱の表書きに「吉田松陰先生自賛肖像 野村靖書」、裏書きに「丁卯首春素軒八十六叟觀并題(印)」の墨書がある。表書きは、松陰門下生であった野村靖(入江九一弟、一八四二〜一九〇九)、裏書きは、名書家で知られる野村素介(素軒、一八四二〜一九二七)の昭和二年(一九二七)筆とみられる。なお、現状は外箱を含めた三重箱仕立てとなっている。軸本体に外題はないが、表紙に「岑堂文庫」の朱印がある。

箱の中には、付属品として、書簡一通と文書二通が備わっている。書簡は、桂太郎から柴田家門へ宛てたもので、その内容は次のとおりである。

御約束之松陰先生之画像、松浦松洞之筆并二自賛、持せ呈出申候間、御笑納被下度候、此幅ハ老生伯父中谷正亮之所有ニ有之候処、老生之所有と相成居候物ニ候、先は為其 拜具

七月廿二日

太郎

柴田賢兒

この書簡から、本図は、中谷正亮から甥の桂太郎の手に渡り、桂内閣の内閣書記官長や文部大臣を務めた萩出身の柴田家門に譲られたことがわかる。表紙の朱印「岑堂文庫」に見える「岑堂」は、柴田家門の号である。その後の伝来経緯は、田中助一が紹介している。

付属品の文書二通のうち一通は、大正六年(一九一七)三月十六日付け、東京帝国大学史料編纂掛編『歴史科教授用参考掛図』への図版掲載許可に対する、柴田家門宛の礼状である。残る一通は、昭和十六年(一九四一)六月から昭和十八年(一九四三)十二月まで東京帝室博物館へ出品された際の借用証書控である。

羽織を纏い、脇差を差して正座し、右手で書物を捲る姿を描く。この構図は、中谷本・萩松陰神社本・品川本に共通している。

賛は、萩松陰神社本と基本的に同文であるが、同神社本が「身許家。国兮死生吾久斉」であるのに対して、本図では「身許君。国兮死生吾久斉」となっている(傍註 筆者)。「家国」とするのは、吉田家本・萩松陰神社本・久坂本・岡部本で、「君国」は品川本・中谷本である。なお、本図は、徳富猪一郎著『吉田松陰』(昭和十七年)の口絵に掲載されているが、『吉田松陰遺墨帖』(山口県教育会、昭和五十三年)には掲載されていない。

### 総括 — 結びにかえて —

ここまで紹介してきた各自賛肖像をまとめたものが、別掲の一覧表である。まず、作成順は、萩松陰神社本(吉田家本もほぼ同時)が最初で、中谷本が最後である。料紙は、吉田家本と萩松陰神社本が絹本で、他はすべて紙本である。法量は似通っているものの、長さは品川本が突出している。肖像の構図は、羽織+正座が最も多く、萩松陰神社本・

品川本・中谷本に該当する。また、吉田家本が、唯一の跣坐像であり、着物の彩色も濃紺で、特徴が際だっている。賛・跋は、吉田家本と萩松陰神社本が、整然として見事な筆致であるが、門下生たちに与えたものには、やや行の乱れ等が見受けられる。印の組み合わせは、吉田家本・萩松陰神社本・中谷本が、関防印に大き目の「日夕佳」、落款に「吉田矩方」・「子義氏」という格式の高いものとなっている。以上、総合的に見て、吉田家本と萩松陰神社本が、作品としての双璧である。

だが、この自賛肖像は、単に記念として作られたものではなく、幕府から江戸護送を命じられ、二度と生きて萩の地を踏むことはないと思つた松陰が、形見としてこの世に残したものと理解しておかねばならない。このことは、吉田家本の跋に記された「諸友其深藏之、吾即礫石、此幅乃有生色也」の言葉が如実に示している。細部の比較結果は前述のとおりだが、いずれも寿像である点は一致しており、松陰自身が認めた、その風貌を今に伝える自賛肖像すべてが残っていることに間違いはない。

## 註

(1) 平成二十一年十一月十七日付けで、山口県指定有形文

(5) 田中助一「不明であった吉田松陰の画像」(『史都萩』第四六号、昭和五十九年)。

化財(歴史資料)の指定を受けている。指定名称は「吉田

松陰関係資料(吉田家伝来)」。

(2) 吉田松陰関係資料一六四。文書標題は「絹本着色吉田

松陰像(自賛)」。

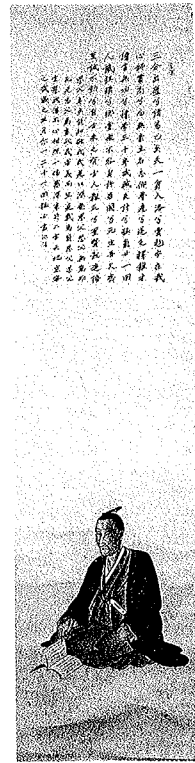
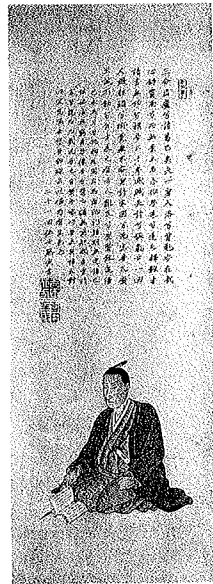
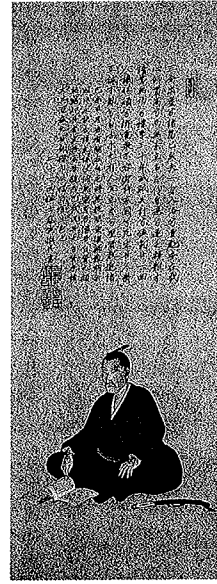
(3) このほか、増野徳民に与えた増野本(『松門烈士遺墨集』所収、昭和四年)が知られているが、これは、松洞筆の肖像に、久坂玄瑞が松陰の賛を書き入れたものであって、松陰の自賛ではない。なお、肖像に限って言えば、久坂の「九似日記」安政六年(一八五九)七月五日条(『松下村塾の偉人久坂玄瑞』所収、誠文堂、昭和九年)。「久坂玄瑞全集」、マツノ書店復刻、平成四年)に、「松洞新卜居、為画先生體」とあることから、松陰の萩出発後に描かれたものもあつたことがわかる。

(4) この書状は、安政五年(一八五八)十一月六日付け、家大人・玉叔父・家大兄に上る書(『戊午幽室文稿』、定本版『全集』四卷所収)に該当する。

吉田松陰自贊肖像考(山田)

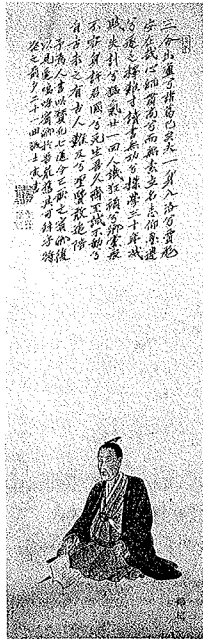
吉田松陰自贊肖像一覽

※図版は縮尺同一



名称
品質・形状
作成日
法量 (cm)
所蔵先

品川本	萩松陰神社本	吉田家本
紙本着色 掛幅装	絹本着色 掛幅装	絹本着色 掛幅装
安政6年5月21日	安政6年5月17日	安政6年5月 (17日)
124.2×30	99×35.4	99.1×35.8
京都大学附属図書館	萩市・松陰神社	山口県文書館



久坂本
紙本着色 掛幅装
安政6年5月21日
103.2×25.6
世田谷区・松陰神社

岡部本
紙本着色 掛幅装
安政6年5月21日
93.7×25.8
周南市美術博物館

中谷本
紙本着色 掛幅装
安政6年5月24日
117×37
個人

吉田松陰自贊肖像考(山田)

三分出處可謂萬已矣夫一身入浴可謂他人在我  
 心師贊高而而無素立名志仰魯建可道之種難才  
 讀書無功可操學三十年滅賊大計可操此其一也  
 人然狂瀆可鄉黨不容有行國分死生吾人前  
 至誠不約分自亦亦之有人宜立志可聖賢敢從倍  
 乙未五月予有聞在之也時春純源正德附離命  
 因以水梳其積大採使清無窮有吾像昔自贊之類  
 此賜和身者其時寫者貌而已哉况予之自贊才情  
 大其際哉之乎御程亦以幅乃有上已也  
 二十一回 松陰士麻呂撰書

贊·跋 (吉田家本)

三分出處可謂萬已矣夫一身入浴可謂他人在我  
 心師贊高而而無素立名志仰魯建可道之種難才  
 讀書無功可操學三十年滅賊大計可操此其一也  
 人然狂瀆可鄉黨不容有行國分死生吾人前  
 至誠不約分自亦亦之有人宜立志可聖賢敢從倍  
 乙未五月予有聞在之也時春純源正德附離命  
 因以水梳其積大採使清無窮有吾像昔自贊之類  
 此賜和身者其時寫者貌而已哉况予之自贊才情  
 大其際哉之乎御程亦以幅乃有上已也  
 二十一回 松陰士麻呂撰書

贊·跋 (中谷本)